



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	技能実習生の日本における生活の実態とその特徴：コミュニティの形成状況からの考察〔論文内容及び審査の要旨〕
Author(s)	白崎, 弘泰
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(国際広報メディア)
Dissertation Number	甲第15106号
Issue Date	2022-06-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/86493
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Hiroyasu_Shirasaki_review.pdf, 審査の要旨



学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（国際広報メディア）

氏名：白 崎 弘 泰

審査委員

主 査 准教授 田 邊 鉄

副 査 教 授 西 村 龍 一

副 査 准教授 藤 野 陽 平

副 査 准教授 天 田 顕 徳

学位論文題名

技能実習生の日本における生活の実態とその特徴
ーコミュニティの形成状況からの考察ー

審査は2022年5月10日10時30分より、Zoomを用いたオンライン・公開形式で行われた。初めに、著者より論文の概要について説明があり、その後質疑応答が行われた。

本論文は、著者が多年にわたって継続してきたフィールドワークをもとにした、実証的研究である。もはや外国人労働者がいなくては成立しない日本社会は、一方で新自由主義と外国人排斥という矛盾を抱え込み、実質的に労働者でありながら労働者としての権利を持たないことで、国内外から批判を受けていること技能実習生という制度を調査研究しようとしても、受け入れ側・実習生ともに協力的とはいえず、調査は困難である。そのような対象に、ここまで踏み込んでアクセスして調査した、大変な労作である。

丹念に積み上げられたエスノグラフィーは、資料的な価値が極めて高く、また、単なる事例紹介・事実列挙にとどまらず、農家や実習生一人ひとりのディテールを丹念に追うことで、コミュニティを構成しようとする動機付けがどのように発生するのかというメカニズムまで明らかにしようとしている。

在外華人の研究は、ヨーロッパ的なコミュニティ概念とは異なる「家族」が軸になっている。多地点で調査を行うマルチサイト・エスノグラフィーとは異なる、一つのグループの定点観測から、本稿の一つの達成である「疑似的コミュニティ」の実相を引き出している。

著者の内面から立ち上がる、空気感やその場の雰囲気までもが感じられるエスノグラフィーは、同時にプラクティカルな提言ともなっており、進めぬ日本の外国人労働者受け入れに、一石を投じる内容になっている。

「大切なところは家族とスマホでつながっていればよいよね」という、これまで中国研究者が経験的に感じていたことを、実習生制度の中でのスマホの扱いの変化からあと付けたアイデアは秀逸で、審査員から高く評価された。

審査員から「A市の地名」を伏せたのはなぜか、という質問があった。これについては「嫌がる人も多いので、先行研究にならって伏せた」という回答だった。それに対して、隠すにしては、はっきりと都市がわかってしまうので、徹底すべき、という指摘があった。

また、「コミュニティ」概念については、研究概念としてのコミュニティと、現

実のコミュニティとの混同がみられること、また、コミュニティ論の始祖であるマッキーバーを扱うのは当然としても、その後の議論の経過をもう少し追っていけば、さらに優れた論考になったのではないかと、という指摘に対して、著者から、コミュニティとアソシエーションの関係を説明するために必要だった、という説明があった。

これと関連して、実習生たちは、コミュニティを形成「しない」のか、「できない」のかどちらなのか、という質問があった。それに対して、「不要だと感じているのではないかと」、「あえてしない」という回答であった。

実習生制度に、スマホが与えた影響について紙幅を割いているが、「補助的な要因」で片づけている点について、実はもっと重要な役割を担っているのではないかと、もう少し突っ込んで議論してもよかったのではないかと、という指摘があった。加えて、不正行為を隠ぺいするためにスマホを禁止した、という推測の根拠を尋ねられて、実際に不正が行われていたこと、スマホ解禁によって明らかになった不正があること、などを上げたが、十分な根拠を示し切れていないのでは、という指摘があった。

以上、本論文は、技能実習生の生活実態を明らかにしたエスノグラフィーとしても、また、技能実習生をめぐる移動論・コミュニケーション論などに、理論的かつ実証的な貢献を果たしており、いささかの瑕疵、改善の余地はあるが、北海道大学において博士の学位を授与されるのに十分な業績であると審査員全員が一致して判断した。